



三 遭遇三

「次はS駅。次はS駅」

アナウンスが流れる。地下鉄は突然うなり声を上げた。急ブレーキだ。また、誰かが線路内に入ったのか。再び、慣性の法則の実証実験だ。立っていた俺たちは斜め四十五度につんのめる。床面が近づく。このまま大地とキスをするのか。

今だ。俺は右足を一步前に出した。サラリーマンたちも俺の声に合わせて右足を一步前に出した。なんとか踏ん張る。見も知らぬ赤の他人たちの心がひとつになる瞬間だ。

崩れかけていた集団が一矢乱れぬ形で元の直立不動の姿に戻った。

おおおお。

これまで、一言も声を上げなかったサラリーマンたちが勝どきの声を上げた。

パチパチパチ。

拍手さえも渦巻いた。

何かを成し遂げた達成感なのか。普段は、見も知らぬ赤の他人で、体をすり合わせることはあっても一言の挨拶もしない関係だが、こうして何かがあったときはお互いに助け合うのだ。小さいながらも楽しいコミュニティだ。

俺も久しぶりに満足感を味わうことができた。地下鉄はゆっくりと走りはじめ、駅のプラットフォームに停車した。ドアが開く。サラリーマンたちは、小・中学生の頃、体育の先生の掛け声で、校長先生のありがたい話を聞くために、狭い体育館の中で「小さな前に倣え」をするかのように、順番に、整然として車両から降りていった。こうした点から、サラリーマンたちの誠実さが行動に滲み出ている。

車内には誰もいなくなった。先ほどの、あの山盛りの群像も、今となっては、俺の過去の記憶となった。

俺一人か。

俺はさっき転んだ際に、ズボンのひざやお尻についた汚れを払いながら長椅子に座る。人が多いとうっとおいしいものだが、人が誰もいなくなると寂しいものだ。誰か、来ないかな。そんな気持ちで車両の入り口を見た。誰かが並んでいる。行列だ。やった。望みがかった。

よっこらしよ、どっこいしょ。

声を掛けながら入って来たのは、老人、じいちゃん、おじいさん、長寿者など、どんな呼び方をしようと、高齢の人たちであった。しかも、次から次へと車両に入ってくる人たちは、全員、杖を持っていた。腰が直角二等辺三角形のように九十度曲がっている者もいるし、反対に、もはや自慢することが何もないにもかかわらず、ふんぞり返っている者もいた。誰にせよ、みんな杖をついていた。

俺をわざわざ挟むかのように老人が両隣に座った。俺は、ふと、気になって座席の上を見た。シルバーシートではない。少し安心する。だが、次々と老人たちが車両に乗り込んで来るため、座席はいっぱいとなり、座れなかった老人は俺の目の前にも立ち始めた。右手で杖を持ち、左手は吊革だ。

俺は迷う。どう見ても、この中では自分は若い方だ。確かに、この席はシルバーシートではない。自分が座っていてもいいはずだ。だけど、目の間に、白髪やつるつるの頭が腰を曲げながら立っているのだ。やはりここは席を譲らなければならない。

だが、車両内の老人の数を見る。俺がひとつ、席を譲ったところで、全員が座れるわけがない。俺は仕事で疲れているんだ。眠たいんだ。酔っているんだ。これまでの経験から、赤ちゃんやサラリーマンのたちのように、この老人たちもどうせ次の駅で降りるだろう、と自分勝手に決めつけ、席を譲ることはやめた。知らぬ顔で目をつぶる。

でも、この老人たちは、一体、どこから来たのだろうか。この電車は最終便だ。花見にしては時間が遅すぎる。花見が終わった後で、カラオケボックスで楽しみでも過ごしていたのか。

S駅の次は何駅だ。彼らはその駅の老人福祉施設から来たのか。それとも病院か。そう言えば、その駅の周辺に、最近、新しく市民病院が建て替えたばかりだ。そこから集団脱走か。いや、病院に戻るのだから、脱走じゃない。リハビリのため、病院に戻ろうとしているのか。どちらにしても、わからない。

俺は意を決して立ち上がり、目の前に杖をついて立っている老人に「どうぞ。お座りください」と席をすすめた。ついでに「みなさん、どちらに行くのですか」と尋ねてみた。

老人は席に座ったものの、返事はない。

俺は同じ内容の言葉を、右隣、左隣の老人に声を掛けるものの、同様に、返事はない。

無視か。それとも耳が遠いのか。

俺はあきらめた。電車が動きだした。俺は足を踏ん張る。先ほどの経験値をいかしてだ。歴史は繰り返されなくても、韻は踏む。また、急ブレーキがかかって倒れたら困る。足を踏まれたら痛い。それに、俺は疲れているとは言え、老人たちに比べ若い。ここで踏ん張らないといけない。まだ、子どもは小学生。家のローンもある。

だが、今、この車両は、老人ばかりだ。それこそ、急ブレーキがかかると、全員倒れてしまうはずだ。

俺は吊革に掴まりながら、両足の膝をやわらかくする。いかなる衝撃も吸収するためだ。

キー、キー。

来た。急ブレーキだ。予想どおりだと思う反面、この電車の運転手は遊んでいるんじゃないかと疑ってしまう。

俺は、踏ん張っていたものの体が流れた。先ほどの痛みと、仕事の疲れのせいだ。隣の老人に俺の体が寄る。だが、老人は車両にゆっくりと入ってきた動きと異なり、さっと自分の体をずらす。

俺だけが斜めに倒れ、俺は自分の体を支えきれずに、手が滑り床面に再び倒れた。他の誰にも迷惑をかけずに俺だけが倒れた。

誰も助けてくれない。他人事のようにして、老人たちは素知らぬ顔だ、いや、老人たちの耳は聞こえづらくなっており、目も白内障や老眼のせいで見えづらくなっているのだ。彼らを責めてはいけない。何と云っても、老人たちは他人には頼らず、自分の三本の足できちんと立っているのだ。

俺は恥ずかしかった。いい、若い者が、自分だけが倒れたのだ。だけど、本音のところでは、俺は若くはない。俺は素知らぬ顔で立ち上がり、元の場所の吊革に何事もない顔でつかまった。老人たちも俺には何も言わないし、視線も合そうとしなかった。

「次はD駅。次はD駅」

電車内にアナウンスが流れた。

電車はゆっくりとスピードを落とし止まった。ドアが開き、俺の予想どおり、老人たちは杖をつきながら、この世に別れを惜しむかのように車両から出て行った。

また、ただ一人残された俺。